

動向

中国における中日語彙対照研究の動向 2018

施 暉

はじめに

今期も中国における中日語彙対照研究は活況を呈した。中日語彙対照研究は20世紀に本格的な幕開けを迎え、21世紀に入ると、中国の日本語研究において中心的な研究分野となり、著しい成果が挙げられている(潘2018)。

本稿は2017年下半年から2018年上半年までの1年間における中日語彙対照研究の動向を概観することを目的とする。まず先期と同じ統計方法で「中国知網」(略称CNKI、中国学術研究最大のポータルサイト)などを「日本語」というキーワードで検索したところ、中日語彙研究に関する論考は24本、学術論文は10本、著作は2冊あった。とはいうものの、筆者は中日語彙対照研究に関する論文について、すべてに目を通したわけではないため、漏れや偏りなどが多々あることを断っておきたい。また、学界展望とはいえ、それはあくまで筆者による同時代の個別研究に関する寸評の集成であるという点にも留意していただきたい。

近年来、英語研究を中心として構築された認知言語学のモデルを踏まえながら自国語または他言語に当てはめようという研究、言わば、斯様なモデルに適応するか否かという検証的な研究は際立っているが、認知言語学の目指している言語の普遍性の解明には如何なる意義があるか、どう位置付けられるかという視点は等閑視されているのではないかという印象を持った。

今期の数多くの研究の中で特に注目すべき研究は2点あり、一つは沈国威

(2018)の《词汇的体系与词汇的习得(語彙の体系と語彙の習得)》であり、もう一つは徐蓮の《多义词量化认知模型的构建与应用(多義語の定量認知的分析モデルの構築と応用)》である。以下は主としてこの2点を取り上げてその内容について概略的に紹介することとする。

1. 沈国威(2018)《词汇的体系与词汇的习得》

沈国威(2018)の《词汇的体系与词汇的习得(語彙の体系と語彙の習得)》では、概念と語の生成(概念化と言語化)について、言わば、命名にあたって「非命名型」「一物一名」「一物多名」という三つの命名法に大別できるが、その言語化において「一物多名」の方が「本質」的な機能を担っていると明言している。一方、語彙の生成は連続的な作業であるため、果たして概念の言語化の初期段階においても「一物多名」であろうかという疑問も生じる。著者は語彙生成の核心的な「一物多名」という方法を解明、選定した上で、基本概念語とプロトタイプ理論を中心に論を展開させ、語の意味体系のありかたと外国語の習得に関する規則性などをめぐって探究を試みた。語の意味体系と外国語の習得との関連性及び有効性に関する論説は外国語教育に資するものとして傾聴に値する。

続いて、著者はまず語彙とは何か、語彙体系とは何かについて論じた上で、語彙の産出について長年にわたって蓄積した見解を述べている。「从影像到概念范畴(写像、イメージから概念の形成まで)」においては、人間は感官(五感)をもって自然界の森羅万象を認識し、そして脳の中に「写像/イメージ」を形成させていく。似ているもの或いは同じものの「写像/イメージ」が繰り返し脳を刺激するうちに、一定の音声で指示されると、概念となる。概念の言語化、つまり、具体的命名について「非命名型」「一物一名」「一物多名」という三種類に分けられ、「一物一名」は、語彙の体系性の本質を表すものではないので、ロジック上のみの理想状態であると、従来の学説に異を唱えている。対して、「一物多名」は、幾つかの異なった名称で同じものを表現するものであり、語彙の実態を反映でき、同義語または類義

語の本質が「一物多名」の表れである。例えば、中国語では「妻」を表す語の群れは「一物多名」であり、「爱人、老婆、媳妇、夫人、内人、孩子他妈、老伴、贱内」などを挙げて「一物多名」を説明している。また、日本語の特徴の一つは、和語、漢語、外来語などによって同じものが表現されるが、これも「一物多名」生成の要因であると説いている。

概念はまた上位概念（上位語）と下位概念（下位語）からなっている。言い換えれば、トップダウン或いはピラミッドの形を成している。例えば、動物という上位語の下位語として「犬、猫、牛」などが挙げられる。犬、猫の下にはそれぞれ「柴犬、チワワ、パピヨン」と「マンチカン、ベンガル、メインクーン」といった包摂的関係が見られる。木という上位概念の下には「枝、葉、根、刺」などの下位概念がある。これは部分と全体の関係を示している。

また、認知言語学の“基础层级与原型理论（基本レベル Basic Level とプロトタイプ理論）”を援用しながら、基本的語彙または上位概念、つまり著者の用語である「代表詞」及びその語数について論じている。その上、「一物一名」型の概念化は人類の百科事典的な認識構造の表れであり、一方「一物多名」型の概念化は人類の言語化の仕組みを反映するものであり、両者は作用、融合しながら機能しているが、互いに代替することができないと指摘している。

さらに、「代表詞」（基本語彙とも言える）と外国語の習得との関連性及び「代表詞」選出の必要性について論を進めた上で、中国語の語彙シソーラスを構築することは、学習者が語彙を理解し把握するのに有効であると提言している。

2. 徐蓮《多义词量化认知模型的构建与应用》

2.1 目次

徐蓮《多义词量化认知模型的构建与应用（多義語の定量認知的分析モデルの構築と応用）》（世界図書出版社、2017年）の目次は以下の通りである。

第一章 序章

- 1.1 引言（はじめに）
- 1.2 相关概念界定（関連概念の規定）
- 1.3 多义词的语义研究模型述评（多義語の意味分析モデルに関する先行研究のレビュー）
- 1.4 研究立场（研究のスタンス）

第二章 多义词量化认知模型的理论构建（多義語の定量認知的モデルに関する理論の構築）

- 2.1 模型构建的理论基础（モデル構築の理論）
- 2.2 模型构建的必要性和可行性（モデル構築の必要性和可能性）
- 2.3 模型的基本观点（モデルの基本的観点）
- 2.4 模型的内部结构（モデルの内部構造）
- 2.5 模型的构建方法（モデルの構築方法）
- 2.6 本章小结（本章のまとめ）

第三章 日语多义词「上」的量化语义结构研究（日本語の多義語「上」の量的意味構造の研究）

- 3.1 「上」的语义结构研究述评（「上」の意味構造に関する先行研究のレビュー）
- 3.2 「上」的义项认定（「上」の意味項目の認定）
- 3.3 「上」的原型（「上」のプロトタイプ）
- 3.4 「上」的范畴结构（「上」のカテゴリー構造）
- 3.5 「上」的拓展机制（「上」の拡張メカニズム）
- 3.6 「上」的意象图式（「上」のイメージ・スキーマ）
- 3.7 「上」的拓展距离（「上」の拡張距離）
- 3.8 「上」的拓展力（「上」の拡張力）
- 3.9 本章小结（本章のまとめ）

第四章 汉语多义词“上”的量化语义结构研究（中国語の多義語“上”の量的意味構造の研究）

- 4.1 “上”的语义结构研究述评（“上”の意味構造に関する先行研究のレ

ビュー)

- 4.2 “上”的义项认定 (“上”の意味項目の認定)
- 4.3 “上”の原型 (“上”のプロトタイプ)
- 4.4 “上”的范畴结构 (“上”のカテゴリー構造)
- 4.5 “上”的拓展机制 (“上”の拡張メカニズム)
- 4.6 “上”的意象图式 (“上”のイメージ・スキーマ)
- 4.7 “上”的拓展距离 (“上”の拡張距離)
- 4.8 “上”的拓展力 (“上”の拡張力)
- 4.9 本章小结 (本章のまとめ)

第五章 「上」与“上”的量化语义结构对比研究 (日本語の「上」と中国語の“上”の量的意味構造の対照研究)

- 5.1 研究的必要性和可比性 (研究の必要性和比較の可能性)
- 5.2 「上」与“上”的语义结构对比研究述评 (「上」と“上”の意味構造に関する先行研究のレビュー)
- 5.3 「上」与“上”的量化语义结构对比 (「上」と“上”の量的意味構造の比較)
- 5.4 从「上」与“上”看日汉语的空间认知模式 (「上」と“上”から見る日本語と中国語の空間認知モデル)
- 5.5 本章小结 (本章のまとめ)

第六章 終章 (終章)

- 6.1 研究结论 (結論)
- 6.2 研究意义 (研究の意義)
- 6.3 遗留课题与展望 (問題点及び今後の研究課題)

参考文献 (参考文献)

附录 (付録)

2.2 研究内容についての紹介

2.2.1 定量認知的分析モデルの構築

著者はまず定量認知的分析モデルの理論的枠組みを設定した。先行研究に

よって指摘されたプロトタイプ、カテゴリー構造、拡張メカニズム、イメージ・スキーマという考察視点に、さらに拡張距離と拡張力という二つの量的要素を加えて、研究の精度を上げることを目指している。また、従来の理論分析の研究手法に心理学実験、インタビュー調査とコーパス調査などを加え、研究データ等についての検証を試みる。

構築されたモデルは以下の図式のように多義語の量的意味ネットワークを目指している。

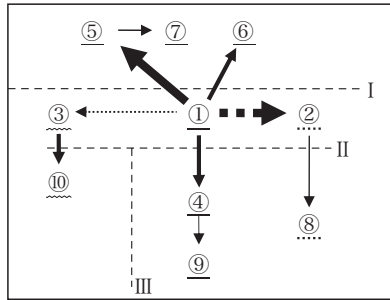


図1 多義語の量的意味ネットワークの略図

なお、多義語の意味構造と各要素との量的意味ネットワークについて以下のように説明されている。

- (1) プロトタイプ（仮に意味①で表す） プロトタイプの意味は多数の意味の中で最も活性化されやすく、活性化の程度が最も高い意味である。
- (2) カテゴリー構造（破線での区分けで表す） 各意味は相互の認知的距離によって階層的な構造を成している。
- (3) 拡張メカニズム（線の種類で表す。点線はメトニミーで、実線はメタファーである） プロトタイプの意味から、メタファーやメトニミーの手法で多数の意味が拡張されている。
- (4) イメージ・スキーマ（意味の下線で表す） イメージ・スキーマの変換と応用する認知ドメインの変換は意味拡張につながっている。
- (5) 拡張距離（矢印の長さで表す） 拡張距離とは拡張的意思とその原義との間の心理的距離のことである。

(6) 拡張力(矢印の太さで表す) 拡張力は意味が実際に使用される程度を表す。

以上の結果を踏まえて、多義語の量的意味ネットワークを構築するものである。

2.2.2 定量認知的分析モデルの応用

2.2.2.1 「上」と“上”の量的意味構造

定量的認知モデルを応用し、日本語の「上」と中国語の“上”の意味構造を考察したところ、以下のことが判明した。

(1) プロトタイプ

「上」と“上”はいずれも単一プロトタイプ意味構造を持ち、そのプロトタイプの意味は〈高い方位〉を表す。〈高い方位〉はさらに〈上方〉と〈上部表面〉という二つの下位的意味によって分担されている。「上」は〈上方〉の典型性がより高く、“上”は〈上部表面〉の典型性が高い。

(2) カテゴリー構造

「上」と“上”は階層的な意味構造を成している。「上」は4層構造であり、“上”は6層構造である。両方とも主に、具象-抽象基準と指示-限定基準によって区分されているが、「上」の意味構造においては、指示-限定基準がより基本的であり、“上”は具象-抽象基準がより基本的である。

(3) 拡張メカニズム

「上」と“上”の多義の形成はプロトタイプの意味を中心にメタファー或いはメトニミーによって拡張したことで実現できた。拡張の起点から見れば、「上」は、〈上方〉と〈上部表面〉からの拡張の割合がほぼ同じであるが、“上”は、〈上部表面〉からの拡張がより多い。一方、拡張の手法は両方ともメタファーによる拡張の方がメトニミーより多い。

(4) イメージ・スキーマ

「上」と“上”の基本スキーマは同じく〈高い方位〉のスキーマである。基本的スキーマはさらに〈上方〉と〈上部表面〉という二つの下位スキーマに分けられる。「上」は〈上方〉のスキーマがより基本的であるが、“上”は〈上部表面〉のスキーマが基本的である。基本的スキーマの変動としては、

両方とも表面性のスキーマがあるが、「上」と“上”の表面性のスキーマは本質的に異なっている。「上」はTR（トラジェクター）がLM（ランドマーク）を包摂するというイメージであるのに対して、“上”のTRはLMの見える表面に付着するイメージである。また、“上”は独自の場所のスキーマがある。各イメージ・スキーマは「上」と“上”の意味構造での方位が違う。

(5) 拡張距離

①プロトタイプ：「上」の〈上方〉から拡張された意味は拡張距離がより近く、拡張構造が固い。それに対して、“上”は〈上部表面〉の拡張構造がより固い。

②カテゴリー構造：具象-抽象軸では、両方とも具象クラスターの方が空間の意味から近い。指示-限定軸では、「上」は指示クラスターの方と、“上”は限定クラスターの方とが空間の意味から近い。

③拡張メカニズム：両方ともメトニミーの拡張距離はメタファーより近い。

④イメージ・スキーマ：両方とも〈高い方位〉のスキーマに対応する拡張の意味として最も拡張距離が遠い。

(6) 拡張力

「上」と“上”の共有の意味とそれぞれ特有の意味を比較してみれば、特有の意味は共有の意味より拡張力が弱い。また、“上”は特有の意味がより多くあり、特殊性も「上」より顕著である。

なお、拡張力の最も強い意味の差異についても、「上」のプロトタイプの意味は拡張力が一番強い。それに対して、“上”の〈方面〉の拡張力が一番強い。よって、“上”の統語力は「上」より高まっていることが分かる。

また、拡張力の均衡性の違いとしても、「上」のプロトタイプの意味の拡張力は他の意味よりはるかに強く、“上”の各意味の拡張力はほぼ均衡がとれている。

(7) 拡張力と他の要素との関係。

①プロトタイプとの関係：「上」のプロトタイプの意味は拡張した意味より拡張力が強く、拡張度がそれほど高くないことが分かる。しかし、“上”

の拡張度が比較的に高い。また、「上」の意味拡張の典型性と拡張力には正の相関関係が見られるが、“上”には見られない。下位プロトタイプの意味では、「上」の〈上方〉及びその拡張意味の拡張力はより強い。それに対して、“上”の〈上部表面〉の拡張力はより強い。

②カテゴリー構造との関係：具象-抽象軸では両者とも具象的な意味の拡張力が強い。一方、指示-限定軸では、「上」は指示的な意味と、“上”は限定的な意味とにおいて拡張力が強い。

③拡張メカニズムとの関係：両方ともメタファーによる意味の拡張力はメトニミーより強く、主にメタファーを通して意味拡張が実現することが明らかになった。なお、「上」は“上”より不均衡性が著しいことも指摘している。

④イメージ・スキーマとの関係：「上」と“上”に共通している各スキーマには同じ拡張力の傾向が見られる。また、“上”の表す独特の場所のスキーマは拡張力がかなり強いと説いている。

⑤両方とも拡張力と拡張距離の間には相関関係が見られない。

2.2.2.2 意味構造に見られる全体的特徴

「上」と“上”の意味構造について対照を行った結果、全体として、「上」の意味構造は指示性がより強く、“上”は限定性が強いことが分かる。この特徴は意味構造の各層において看取されている。

「上」と“上”の意味構造に見られるこの相違は、そのプロトタイプ内部

表1 「上」と“上”の意味構造の全体的特徴

	「上」	“上”
プロトタイプ	指示性の強い〈上方〉が典型的	限定性の高い〈上部表面〉が典型的
カテゴリー構造	指示クラスターの意味は多い	限定クラスターの意味は多い
拡張メカニズム	—	限定性の高い〈上部表面〉から拡張した意味はより多い
イメージ・スキーマ	指示性の強い〈上方〉のスキーマが基本的である	限定性のつよい〈上部表面〉のスキーマが基本的である
拡張距離	指示性の強い〈上方〉からの拡張は距離が近く、拡張構造が固い	限定性の強い〈上部表面〉からの拡張は距離が近く、拡張構造が固い
拡張力	指示性の強い意味の拡張力は強い	限定性の強い意味の拡張力は強い

の傾向に関わるものだと述べている。「上」と“上”のプロトタイプの意味は同じく〈高い方位〉である。しかし、プロトタイプの内部構造に相違が潜んでいる。「上」は指示性の高い〈上方〉がより典型的で、“上”は限定性の高い〈上部表面〉がより典型的である。これは「上」と“上”の意味構造の共通点と相違点をもたらす要因の一つではないかと指摘している。

2.2.2.3 対照研究から見た日本語と中国語の空間認知と事態把握の在り方
以上の対照研究を通じて、日本語と中国語の空間認知及び事態把握の異同をめぐって考察を行った結果、下記の3点を挙げている。

(1) 「上」の〈場所〉という意味の欠如によって、その意味構造は限定性が弱いという特質が存しているだけではなく、日本語と中国語における実名詞（普通名詞）を場所化するメカニズムの相違も見られる。

(2) 「上」と“上”の表面のスキーマの相違から日本語は主観的な事態把握をするのに対して、中国語は客観的な事態把握をすることが多いことが分かった。

(3) 「上」と“上”の時間メタファーの分析を通して、“上”は場所の時間メタファーへも方向の時間メタファーへも拡張しているが、「上」は方向の時間メタファーしかない。この差異の原因は「上」の限定性が弱いことにある。

それのみならず、方向の時間メタファーでは、両者とも水平方向の時間メタファーは垂直方向より強いが、中国語の垂直方向の時間メタファーの方が日本語よりはるかに発達している。

垂直方向の時間メタファーでは、日本語にも中国語にも対峙的方略が運用され、しかも上下対称的である。対峙的方略と同方向的方略を共用しているという中日両言語は上下非対称の英語と異なり、日本人と中国人のものの捉え方について共通点を見せている。

3. その他

3.1 論文

3.1.1 借用語の対照研究

言語接触と言語交流によって、中日両国語には大量の借用語が存在している。借用語についての研究は、依然として盛んに行われており、その分野の論文は注目に値する。沈国威（2012）の分類によれば、検索した11本の論文を「中国から輸入した借用語」「日本から輸入した借用語」「中日・日中互動語（中日両言語の相互接触によってできた借用語）」「その他」に分類することができる。

3.1.1.1 中国から輸入した借用語

陳曉鷗（2017）《古汉语词汇在日语中的延续和演化（中国古典語の日本における伝承と変化について）》では、日本語における漢語の形成について考察されているが、先行研究との関連性に関しての言及は充分とは言い難い。李斌・陳静（2017）《基于〈日本語語源大辞典〉的汉源日词历时分析（日本語語源大辞典における中国語出自の漢語についての通時的考察）》では、《日本語語源大辞典》から中国語由来の漢語を6000語以上抽出した上で、量的な分析を通じて、その漢語の由来について考察を行っている。蔡嘉昱（2018）《日语汉语词的和化与表記—以日语汉语词中的叠词形副词为例（日本語における漢語の日本語化と表記）》は、日本語の漢語における重ね型の副詞を研究対象に、BCCWJというコーパスを活用して、漢語の非漢字表記と漢語の日本語化との関係について考察を試みた。

3.1.1.2 日本から輸入した借用語

譙燕（2017）「日本語由来新語の借用状況に関する一考察」では、中国の新聞及びインターネットに現れる日本語から借用した新語の使用実態についての考察によって、日本語より輸入した時期や順番などが明らかになった。また日本語から借用した新語が、中国語に影響を与えたことに関しても分析を行った。張秀梅（2017）の《“宅”与“御宅”辨析（“宅”と“御宅”の使い分けについて）》は、意味用法を中心に“宅”と“御宅”の使い分けにつ

いて分析し、明らかにしようとした。両者の出自をめぐって時代を遡ってみたところ、中国語の“宅”の新しい意味用法は日本語の「御宅」に由来したものであるが、中日伝統文化、社会環境などの違いから、意味用法及びニュアンスとしては“宅”と「御宅」との相違点も見られた。

3.1.1.3 中日・日中互動語とその他

朱棠 (2018) 《近代中日同形詞“学会”的语义演变 (近代中日同形語「学会」の意味変化について)》は、「学会」の語源と意味について考究を行った。「学会」は中国語出自の言葉であったが、「学会団体」等のような現代的意味としては日本の明治初期の文献にすでに登場し、しかも19世紀の末に英和翻訳によって使用が加速されるようになった。その後、「學術団体」は日本から中国に伝来し、民国時代に相次いで学会が創設されたことに伴って、中国語に定着したということが判明した。許雪華・施建軍 (2018) 《关于日语汉字词汇多样性的再认识 (日本語における漢語の多様性についての再認識)》は、「混種語」「当て字」を取り上げて非典型的漢語の使用実態を分析した。日本語における漢語の範囲指定と認定において有益な試みとして、注目を要する。そのほか、葉翊邑 (2017) 《日中同形語字形類似度の統計—自然言語処理における漢字分割法の利用を中心に》などの論考も挙げられる。

3.1.2 中日固有語彙の対照研究

固有語彙についての対照研究は、特に認知言語学の理論を援用しながら考察を行うものが多かった。例えば、鐘勇 (2017) 《基于大规模语料库的汉日触压觉形容词认知语义对比研究—以“硬”和“硬い”为例 (大規模コーパスに基づく中日触覚形容詞に関する認知言語学的対照研究—“硬”と“硬い”を一例として)》は、“硬”と“硬い”の意味拡張を中心に分析、比較を行い、次のような共通点と相違点が明らかになった。共通点としては、(1) 全体的に意味拡張の方向は一致している。(2) プロトタイプ意味が共通である。(3) 意味拡張の程度が高い。(4) 一次の意味拡張は二次の意味拡張よりはるかに多い。(5) メタファーによる意味拡張の単語が特に多い。また“硬”と“硬い”について、それぞれ多義的であり、異なる意味拡張の様相を見せており、相違点もあると説いている。張珮・曹金波 (2018) 《从通感修辞视角看

中日味覚形容詞の詞義演变（共感覚から見る中日味覚形容詞の意味変化について）》は、中日形容詞の“酸（酸っぱい）”“甘、甜（甘い）”“苦（苦い）”“辣（辛い）”“咸（塩辛い）”等に関してその派生意味の産出プロセス及び両者の相違点について考察している。

3.1.3 性向語彙

施暉・欒竹民（2018）《中日韩三国“性向词汇”中的“比喻词汇”对比研究初探（中日韓三言語における「性向語彙」の比喻表現についての対照研究の一考察）》では、まず三言語の比喻性向語彙に関する対照研究の目的、意義、位置付け及び他の研究分野への波及成果等について論述した上で、研究資料の性質の説明と研究方法の構築について説いている。その試みとして著者の先行研究によって明らかになった中日韓三言語における「性向語彙」の使用語彙数のベスト10の意味項目に表れている比喻語を取り上げて、まず定量的分析、比較を行い、三言語の共通点と相違点を浮き彫りにした。続いて、「性向語彙」の比喻語と辞書や文学作品の比喻語との違いについて以下のように指摘している。(1) 創造性、(2) 独創性、(3) 新鮮、受け入れられやすさと多様性である。比喻語の生成と使用についての相違点は三国の社会文化、生活環境、風土などと大いに関係している。その他、施暉（2017）《论中日韩三国“性向词汇”中的男女差异（中日韓三言語における「性向語彙」の男女差について）》なども見られる。

一方、翻訳対照研究としては、金華・王穎斌・章文婷（2018）《汉语新兴词的日译研究（中国語における新語の日本語翻訳についての考察）》、鄒存峰（2018）《基于生态翻译学视阈下的网路流行语日译研究（Eco-translatology¹⁾に基づくインターネット流行語の日本語翻訳についての考察）》を挙げる事ができる。

3.2 著書

楊超時《近代中日词汇交流与“的”“性”“化”构词功能的演变（近代中日

1) Eco-translatology とは翻訳と生態学を結び付ける翻訳研究理論である。

語彙交流と「的」「性」「化」の語形成機能の変化について》(中国社会科学出版社、2017年)は、以下の十章からなる。

第一章 与本研究相关的前人研究(先行研究のレビュー)

- 第一節 汉日词汇交流研究的历史及现状(中日語彙交流の歴史と現状)
- 第二節 后缀问题研究的历史与现状(接頭辞に関する研究の歴史と現状)
- 第三節 前人研究的小结(先行研究についてのまとめ)
- 第四節 研究对象的选定(研究対象の選定)

第二章 日语后缀「的」的用法与演变(日本語の接尾辞「的」の用法と変化)

- 第一節 关于日语后缀「的」的前人研究(日本語の接尾辞「的」に関する先行研究)
- 第二節 本书选定的明治书面语资料(本書に使用する明治時代の文章語研究資料)
- 第三節 『東京日日新聞』中「的」的用法(『東京日日新聞』における「的」の用法)
- 第四節 明治十年(1877)后缀「的」的用法(明治十年(1877)接尾辞「的」の用法)
- 第五節 明治中期『反省会雑誌』中「的」的用例(明治中期『反省会雑誌』における「的」の用例)
- 第六節 本章小结(本章のまとめ)

第三章 汉语助词“的”的用法与演变(中国語の助詞“的”の用法と変化)

- 第一節 汉语助词“的”的历时性研究(中国語の助詞“的”の通時的考察)
- 第二節 本书对清末助词“的”的研究方法(清末期における中国語の助詞“的”についての研究方法)
- 第三節 本书选定的清末书面语资料(本書に使用する清末期の文章語研究資料)
- 第四節 《时务报》中“的”的用法(『時務報』における“的”の用法)
- 第五節 本章小结(本章のまとめ)

第四章 清末报刊中“的”字出现的变化（清末の新聞に現れる“的”の变化）

第一節 《清议报》中“的”的用法（『清議報』における“的”の用法）

第二節 《译书汇编》中“的”的用法（『訳書匯編』における“的”の用法）

第三節 本章小结（本章のまとめ）

第五章 清末报刊中助词“的”用法的发展（清末期の新聞における助詞“的”の用法拡大）

第一節 《新民丛报》中“的”的用法（『新民叢報』における“的”の用法）

第二節 翻译小说中助词“的”的用例（翻訳小説における助詞“的”の用例）

第三節 本章小结（本章のまとめ）

第六章 明治时期日语后缀「性」的用法（明治時期における日本語の接尾辞「性」の用法）

第一節 关于日语后缀「性」的前人研究（日本語の接尾辞「性」に関する先行研究）

第二節 明治时期日语「性」字用例的抽取（明治時期の日本語「性」の用例の抽出）

第三節 「性」作后语素的二字词（後部要素としての「性」による二字語）

第四節 「性」作后语素的三字词（後部要素としての「性」による三字語）

第五節 与「性」有关的其他语用形式（「性」と関連する他の語形式）

第六節 本章小结（本章のまとめ）

第七章 清末时期汉语类后缀“性”的用法（清末期の中国語における接尾辞“性”の用法）

第一節 关于汉语类后缀“性”的前人研究（中国語の接尾辞“性”に関する先行研究）

第二節 清末时期汉语“性”字用例的抽取（清末期の中国語“性”の用例の抽出）

第三節 “性”作后语素的二字词（後部要素としての“性”による二字語）

第四節 “性”作后语素的三字词（後部要素としての“性”による三字語）

第五節 与“性”有关的其他语用形式（“性”と関連する他の語形式）

第六節 翻译小说中“性”的用法（翻訳小説における“性”の用法）

第七節 本章小结（本章のまとめ）

第八章 明治时期日语中「化」的用法（明治時期の日本語における「化」の用法）

第一節 关于日语后缀「化」的前人研究（日本語の接尾辞「化」に関する先行研究）

第二節 明治时期日语「化」字用例的抽取（明治時期の日本語「化」の用例の抽出）

第三節 「化」作后语素的二字词（後部要素としての「化」による二字語）

第四節 「化」作后语素的三字词（後部要素としての「化」による三字語）

第五節 本章小结（本章のまとめ）

第九章 清末时期汉语类后缀“化”的用法（清末期における中国語の接尾辞“化”の用法）

第一節 关于汉语类后缀“化”的前人研究（中国語の接尾辞“化”に関する先行研究）

第二節 清末时期汉语“化”字用例的抽取（清末期の中国語“化”の用例の抽出）

第三節 “化”作后语素的二字词（後部要素としての“化”による二字語）

第四節 “化”作后语素的三字词及其他（後部要素としての“化”による三字語及びその他）

第五節 翻译小说中“化”的用法（翻訳小説における“化”の用法）

第六節 原创小说中“化”的用法（中国語の小説における“化”の用法）

第七節 本章小结（本章のまとめ）

第十章 终章：从中日词汇交流的角度所做的归纳（中日語彙交流という視点による考察）

第一節 对“的”的研究结果的归纳（“的”に関する結論）

第二節 对“性”的研究结果的归纳（“性”に関する結論）

第三節 对“化”的研究结果的归纳（“化”に関する結論）

参考文献（参考文献）

- 付録1 《时务报》中出现音译“的”（『時務報』における音訳の“的”）
付録2 《新民丛报》的用例结构分类（『新民叢報』の用例についての分類）
付録3 晚清小说年表（清末期の小説年表）

おわりに

以上、中日語彙対照研究という分野におけるこの1年間の大まかな傾向を紹介してきたが、筆者の力不足のため、多くの優れた論文を割愛せざるを得なかった。また、文献の内容の読み誤りなどもあるかと思う。御海容を願う次第である。

2018年8月に蘇州大学にて「第十回漢日対比語言学研究（協作）大会」が開催され、国内外から多くの研究者及び学生が意欲的な研究発表等を行った。これを契機に中国における中日語彙対照研究が一層発展し、更なる研究成果を上げていくことを期待して、今期の展望を終える。

参考文献

- 沈国威（2012）《日语借词的研究》[J]，《日语学习与研究》第3期，pp.1-9。
沈国威（2018）《词汇的体系与词汇的习得》，《东北亚外语研究》第2期，pp.9-15。
陈晓鸥（2017）《古汉语词汇在日语中的延续和演化》[J]，《昆明学院学报》第4期，pp.107-110。
李斌・陈静（2017）《基于〈日本语源大辞典〉的汉源日词历时分析》[J]，《南京师范大学文学院学报》第3期，pp.177-183。
谯燕（2017）《日本語由来新語の借用状況に関する一考察》[C]，《日本学研究》第27輯，pp.3-10。
施暉（2017）《论中日韩三国“性向词汇”中的男女差异》[J]，《苏州科技大学学报》（社会科学版）第3期，pp.42-47。
施暉・栾竹民（2018）《中日韩三国“性向词汇”中的“比喻词汇”对比研究初探》[J]，《东北亚外语研究》第2期，pp.16-24。
徐莲（2017）《多义词量化认知模型的构建与应用》[M]，世界图书出版社。
叶栩邑（2017）《日中同形語字形類似度の統計—自然言語処理における漢字分割法の利用を中心に》[C]，《日本学研究》第27輯，pp.74-89。
杨超时（2017）《近代中日词汇交流与“的”“性”“化”构词功能的演变》[M]，中国社会

科学出版社.

- 钟勇 (2017)《基于大规模语料库的汉日触压觉形容词认知语义对比研究—以“硬”和为「硬い」为例》[J],《日语学习与研究》第6期, pp.34-41.
- 张秀梅 (2017)《“宅”与“御宅”辨析》[J],《日语教育与日本学》第1期, pp.77-87.
- 蔡嘉昱 (2018)《日语汉语词的和化与表记—以日语汉语词中的叠词形副词为例》[C],《汉日语言对比研究论丛》第9辑, pp.149-162.
- 金华·王颖斌·章文婷 (2018),《汉语新兴词的日译研究》[C],《日语教育与日本学研究》, pp.14-21.
- 潘钧 (2018)《国内的日语汉语对比研究概述》[C],《汉日语言对比研究论丛》第9辑, pp.1-16.
- 许雪华·施建军 (2018)《关于日语汉字词汇多样性的再认识》[J],《东北亚外语研究》第2期, pp.3-8.
- 张珮·曹金波 (2018)《从通感修辞视角看中日味觉形容词的词义演变》[C],《汉日语言对比研究论丛》第9辑, pp.127-139.
- 邹存峰 (2018)《基于生态翻译学视阈下的网路流行语日译研究》[C],《日语教育与日本学研究》, pp.41-45.
- 朱棠 (2018)《近代中日同形词“学会”的语义演变》[J],《湖南科技大学学报》(社会科学版)第3期, pp.168-176.

施暉 Shi Hui 蘇州大學外國語學院教授 專門：日本語學・日中言語文化比較